

# ART KISS LEITER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum, Kumamoto  
熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp> [2007.春号] **vol.32**

## 森村泰昌 Yasumasa Morimura 美の教室、静聴せよ

2007年3月24日(土)～7月8日(日)

■開館時間:午前10時～午後8時(展覧会入場は7時30分まで)

■休館日:火曜日

■観覧料:一般1000(800)円、高・大学生500(400)円、小・中学生300(200)円、熊本市内小・中学生は無料(名札など証明できるものをお持ち下さい。)( )内は前売及び20名以上の団体料金、ただし、小・中学生は団体割引のみで前売はありません。

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、または熊本市民で70才以上の方は割引があります。



# Museum information

## 講演会「ARS KUMAMOTO—熊本力の現在」 2006.12.23

アルス・クマモト展初日に当館館長の南高宏が出品作品についての想いを語りました。熊本市現代美術館の基本理念第3に掲げる、「熊本、そして九州で表現活動続ける芸術家を応援する美術館」の理念の実現の一環として企画したこと、様々な作家との縁深き出会い、作品との出会いについて話しました。

\*南高宏「Ars Kumamoto—熊本力の現在 美の故郷、熊本の空を見上げて」、「ARS KUMAMOTO展」カタログもあわせてご覧下さい。



## アルス・クマモト記念 クリスマス・イヴコンサート 2006.12.24

アルス・クマモト記念コンサートとして、熊本オペラ芸術協会によるクリスマス・イヴコンサートを開催致しました。モーツァルト生誕250年を記念してモーツァルトのオペラを中心に、スタンダードなクリスマスソングも混ぜて、クリスマス・イヴを彩る華やかなコンサートとなりました。繊細さと迫力を併せもつオペラの歌声と、平成音楽大学の学生による、瑞々しく清らかなハンドベルの音色が、見事に調和されていました。最後には大勢のお客様と「きよしこの夜」を合唱して幕を閉じました。(A.A)



## 新春コンサート 2007.1.6

2007年の幕開けを祝う新春コンサートを開催しました。出演は、松下知代お琴教室の皆さんと尺八奏者の藤山雅弘さん。宮城道夫作曲「春の海」の演奏をはじめ、「華紋」「サトウキビ畑」ほか古典曲、現代曲を取り混ぜて披露、ホームギャラリーに広がる華麗な箏の音色は、多くの観客を楽しませてくれました。

天草から聞きに来たという女性は、「優れた演奏を間近に聞くことができ、とても良かったです。気軽に音楽と絵画の両方を楽しめる現代美術館が大好きです。」と、語ってくれました。(事務局次長：山田千明)



## ファミリー・ツアー 2007.1.14

アルス・クマモト展のファミリー・ツアーには30名を超える皆さんの参加があり、0歳の赤ちゃんも含めて一緒に楽しく展覧会を探検しました。特に人気があった作品は、色んな顔のお友達が隠れている上村隆一さんの「心経・さまよう子どもたち」。様々な発見があったようです。(A.S)



## アルス・クマモト記念トーク「私の大好きなこの作品」

### ①友住容子さん(人権擁護委員)2007.1.7

元報徳保育園園長で人権擁護委員の友住容子さんに、大好きな作品についてお話いただきました。まず紹介して下さったのは、保育園の園児たちから記念にもらった作品。大好きな園長先生のために描いた愛情いっぱいの絵です。そして喫茶セルバンに通った高校時代から、人生のさまざまな時期に出会った、海老原喜之助、小倉遊亀、堀文子らの作品に刺激を受け、癒され、勇気付けられてきた思い出を語っていただきました。(Y.H)



### ②泉冬星さん(上通商栄会会長)2007.1.21

第2回目は泉冬星さん(上通商栄会会長)にお話をお聞きしました。

海老原喜之助との個人的な思い出、エビ研に通った幼少時代の思い出、郷土画家の乙葉統、境野一之、宮崎静夫との出会い、エビ研出身で、熊本を離れて岡山県で活躍した横田健三との思い出など、熊本という土地と美術・文化の関りの深さを想わせるお話でした。ご所蔵の作品の数々をスクリーンで紹介しながら、それぞれの作品への思いについても語っていただきました。(H.T)

\*海老原喜之助との思い出に関しては、2004年の展覧会「海老原喜之助生誕100年祭 画家再生」カタログに「おひげとお酒とタバコの香り」(泉冬星)が掲載されております。



### ③米満淑恵さん(特別養護老人ホーム「天寿園」施設長) 2007.2.4

第3回目は、特別養護老人ホーム「天寿園」施設長の米満淑恵さんにお話を伺いました。大学時代に生活美学科に在籍されていた米満さんは、日々の生活を豊かにする美にご関心があるとのこと。今回は、「私の大好きなこの作品」として、ご主人と病院を始める際に購入したアンドレア・ブラジリエの馬の絵をご紹介頂きました。馬が颯爽と疾走している情景を描いたこの作品は、常に米満さんご家族を鼓舞し、今では家族の絆の象徴となっているそうです。また、作品を設置する空間作りについても教えて頂きました。

後半では、ご自身が施設長を務める「天寿園」での環境作りについて、天寿園壁画を描かれた画家の古場田博さんに飛び入り参加して頂きながら、お話を伺いました。(A.A)



## CAMKレクチャー・カレッジ

### ①「フラ・アンジェリコの世界」2007.1.14

当館はこれまで、CAMKレクチャー・カレッジとして、開催中の展覧会に沿ったテーマでの講演を開催してきました。ほかには、熊本市の生涯学習プログラムである「市民大学」において、現代美術についての講座を設けたこともあります。今回は、より開かれた市民美術講座の一環として企画されました。

1回目は「フラ・アンジェリコの世界」について、当館学芸員の本田代志子が、伝説化されたフラ・アンジェリコの修道士として行った画業を、サン・マルコ修道院の作品、《受胎告知》に描かれたモチーフを中心に紹介しました。



### ②「佐伯祐三の世界」2007.1.28

第2回目は、「佐伯祐三の世界」と題して、当館学芸員の芦田彩葵が、佐伯祐三の画業を追いながら、その表現の独自性について紹介しました。佐伯は僅か30歳という短い生涯にも拘らず、私たち日本人のバリ・イメージを決定付ける作品を多く残しました。会場の皆様の熱い眼差しから、東洋の書を思わせる繊細な線描と、西洋の油絵具の重厚さを融合した佐伯の作品が、今もなお日本人の感性に強く訴えかけていることが伝わってきました。



### ③「オーブリー・ビアズリーの世界」2007.2.11

「オーブリー・ビアズリーの世界」というタイトルのもと、当館学芸員の富澤治子が、ビアズリーの生涯と作品についてご紹介しました。ビアズリーは、結核を患っていたため短命で、たった5年間の制作・活動期間でしたが、100年以上後の我々をいまでも魅了する作品を次々と生み出しました。「アーサー王の死」、「サロメ」、「髪盗み」、「女の平和」、「アリババ」、「モーバン嬢」、「ヴォルポーネ」など今も読まれる不朽の名作の挿絵も多く手がけました。会場に集ってくださった皆様にもその多面的な魅力を楽しんでいただけたようです。



## 土曜日コンサート 2007.1.20/2.3

アルス・クマモト開催記念として、従来のフライデー・ジャム・コンサートに加えて、土曜日コンサートを2回行いました。

第1回目は、ソプラノ歌手の原田千春さんと、ピアノの村井智子さんによるミュージカルコンサートでした。『回転木馬』、『王様と私』、『エビータ』、『キャッツ』など、お馴染みのミュージカルから選曲した歌と演奏を披露して下さいました。その華やかな雰囲気と表情豊かな歌と音色に、観客の皆さんもうっとり夢の世界へ。

第2回目は、藤川いずみさんによるお琴のコンサートでした。藤川さんには、昨年の秋にアートプレックスのイベントで東雲座として、当館のホームギャラリーでお座敷歌を奏でて頂きました。今回はがらりと趣向を変えて、三木稔作曲の斬新な前衛音楽を新琴(21絃琴)で弾いて下さいました。確かなテクニックに裏打ちされた斬新な音色に、観客の皆さんも興味津々のご様子で、一気に引き込まれていました。(A.A)



1/20



2/3

## GIII vol.44 川上尉平展 (2007.1.10-2.25)

熊本の河内町船津出身の洋画家、川上尉平(1917-1979、春陽会会員)の展覧会を開催しました。熊本市収蔵作品は「熊本の作家」シリーズとして紹介しておりますが、その第5回目にあたります。

川上の作品は「風景」、「肉塊」、「人物」、「静物」の4つのシリーズに区分されます。

そのなかで、最も画家としての力強さを感じるのには、「肉塊」シリーズです。牛、豚、鶏の生肉の描写は、まさに油絵の具の質感が持つ生々しさを十分に活かしたものであり、その肉のグニャリとした触り心地まで感じさせます。川上の心中には、レンブラントの《屠殺された牛》(1655)への強い憧れもおそらくあったのでしょうか。

「風景」シリーズにおいては、山肌を描いた作品群が特に目をひきます。「肉塊」シリーズとも通じる質感の生々しさは、一見平穏な風景のなかにひそむ、雄大な自然の荒々しさを表現しています。他方、「静物」・「人物」シリーズには、川上の洗練された趣味のよさを感じさせます。モデルとなった人物は川上の家族がそのほとんどですが、ファッショナブルな洋服に身を包み、人物固有の魅力をアピールしています。時代によっては、当時のパリの流行画家の影響も垣間見られますが、そのセンスのよさゆえに共鳴したことは想像に難くありません。

出品作品はすべて、平成5年4月21日にご遺族から寄贈されたもので、そのほとんどが寄贈後、初公開でした。今回、作品を一堂に展示することで、その魅力を再発見することができました。今後も川上尉平については、作品調査を続けていく予定です。(H.T)



# SUITO TŌ KUMAMOTO

【スイトット・クマモト】



本年度のスイトット・クマモトは、熊本県の華人インタビューです。(インタビュアー・構成: 龍座江美)

\*いける＝花を生かす、ことと考へ、ここでは「生ける」と表記します。

## 【草心流編】

「自分の生きたいと思う素材を生けるために」昭和51年に草心流を創流された板垣草心先生のお話の中で一番印象に残ったのが、「季節感をしっかり感じて生けてほしい」という言葉だった。今では一年中同じ花が花屋に並び、長持ちして見栄えが良い花が多くなった半面、季節感が感じられないお花が増えたとおっしゃる先生は、花材はご自分の畑で育てられるという。丹精込めて育てた花を生ける心持は、そのまま出来上がった作品に表れるのだと思った。また、流派を超えた男性だけの研鑽の場「むからの会」を先生が始められたのも、先生のいけばな、自然に対する強い思いの表れなのだと感じた。「自然を通して自然を学ぶ」のがいけばなをやるものの本来の姿だと思います、とおっしゃる先生のつつい生けてしまうお好きな花材はエノコロソウとのことだったが、やわらかい先生のお声とたたずまいには一重のなでしこがお似合いだと思った。



熊本の華人展vol.1 作品

流派名の表記に誤りがありました。  
お詫びして訂正いたします。

## 【知香編】

(正) 知香流

お話をお伺いしたのは、笑顔が素敵な高木香昌先生。「お花はそのままで十分きれいなので、最初いけばなはお花をいじめる行為にしか思えなかったんですよ。」とおっしゃる先生が知香流を始められたきっかけは、知人宅で、ススキとリンドウに合わせて砂で山と月が描かれている知香流の作品に出会ってからだという。「身の回りにある石や流木、人形などとお花を調和させ、さらに砂で描くことで「新たな美」を作り出すことができる場所に魅かれます。」とおっしゃる先生から、もともと知香流は格花を生ける際に使用されなかった花を使い、人形や砂と調和させて残り花とは思えない作品に仕上げるところから始まったというお話を伺い、女性的で優しい流派だと感じた。「調和とおもてなしの心が大切だと思います。」とおっしゃる高木先生のつつい生けてしまうお好きな花はリンドウやキキョウとのことだったが、高木先生の明るい笑顔には風に揺れるマーガレットがぴったりだと思った。



熊本の華人展vol.3 大作

# WORLD NEWS

## Black Painting @Haus der Kunst(ドイツ、ミュンヘン)

2006年9月15日～2007年1月14日

“Black Painting” は、戦後のアメリカ美術を代表するロバート・ラウシェンバーグ、アド・ラインハート、マーク・ロスコ、フランク・ステラの黒い絵画のみを展示した展覧会である。作品は、作家ごとに1部屋ずつ5点前後が展示されている。作品をじっくり鑑賞しながら、戦後のアメリカ美術の特質の一つとなったスケール感も体験することができ、各作家の芸術観が効果的に表現されている。作品数は多くはないが、当時の様々なアーティストへのインタビューをはじめ、時代背景などを知る映像資料は充実しており、見ごたえのあるものであった。

この展覧会で最も興味深い点は、テーマの設定である。なぜ、1950～1960年代においてアメリカで黒い絵画が多く描かれたのかを、抽象表現主義、ネオ・ダダ、ミニマリズムと各芸術運動を代表する作家たちの黒の絵画をまとめて展示することで探ろうとする試みである。さらに、戦後の僅か20年ほどの間に目まぐるしく興った、抽象表現主義、ネオ・ダダ、ミニマリズムという芸術運動の歴史を概観できる構成になっている。50年代、ネオ・ダダを代表するラウシェンバーグとミニマリズムの創生期に立ち会ったステラは、その作家活動の初期に黒の連作を描いた。その後、ラウシェンバーグはコンパイン・ペインティング、ステラはシェイプド・キャンバスなど多様な作風を展開していく。一方、抽象表現主義のロスコ、ラインハートが60年代に描いた黒の絵画は、彼らの芸術の一つの帰結でもあった。様々な様式を変遷した後の到達点としての黒の絵画なのである。つまり、ここでは、ラウシェンバーグ、ステラの出発点としての黒の絵画と、ラインハート、ロスコの終着点としての黒の絵画が同じ空間で展示されている。そこでは、作風が逆転し、ラウシェンバーグとステラは、筆触がある抽象表現主義風の作品を描いているのに対して、ラインハートとロスコの作品は、ミニマリズムを思わせる手業を感じさせない非常にシンプルな表現となっている。

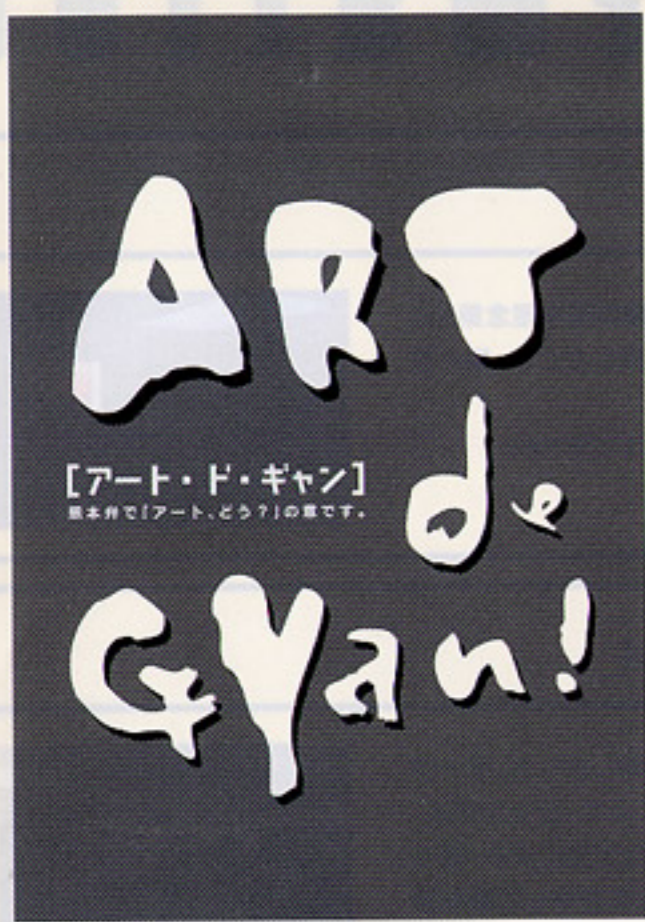
初めに黒という色彩に注目したのは、マティスであった。彼は、黒という色彩の純粹性、そして黒、つまり闇が存在することによって表出する光の存在を認識していた。黒を主題に描いた大胆な作品《コリウールのフランス窓》では、黒がもつ象徴性をも表現しているといえる。ラウシェンバーグは黒い作品を振り返って、色彩の豊穡を描いていたと述べている。しかし、この時代に彼らが黒を選んだ最大の理由は、絵画が単なる装飾品の一部としてではなく、そこに精神性と崇高さを付与することで、より人間の根源的問題を表現しようとしたことにある。人間の根源的問題。それは、死、すなわち無である。50年代、コロムビア大学で鈴木大拙が説いた禅の「無」という概念は、多くの芸術家に影響を与えた。余計なものを削ぎ落とし、

如何にその真実を見る者に伝えるかという思想が、色も形も還元していくことで、よりミニマルな絵画へと展開していく背景にあった。その一方で、色彩がもつ象徴性ではなく、絵具の物質性により焦点を当て、色味を感じさせないグレーを意図的に使うことで、マテリアルとしての絵画を表現しようとする流れもあった。興味深いことに、今年の秋には、ラウシェンバーグと同じくネオ・ダダを代表するジャスパー・ジョーンズのグレーの作品ばかりを集めた展覧会が、アメリカのシカゴ・アート・インスティテュートで開催され、その後メトロポリタン美術館に巡回される予定である。

“Black Painting”は、色彩によって、当時の社会を検証しようとする意欲的で斬新な展覧会であった。(A.A)

- \* 戦後のアメリカ美術を知るお薦め3冊です。
- ・『20世紀絵画の大陸：ニューヨーク・スクール：ポロック、テ・クーニング…そして現在』展覧会カタログ、東京都現代美術館、1997年。
- ・ドリー・アシュトン著、南條彰宏訳、『ニューヨーク・スクール：ある文化的決済の書』、朝日出版社、1997年。
- ・エミール・ディ・アントニオ、ミッチ・タックマン著、林道郎訳、『現代美術は語る ニューヨーク・1940-1970』、青土社、1997年。





## 塔本シスコはキャンバスを耕す

2007.1.22-1.31 画廊喫茶三点鐘 熊本市手取本町3-8有明ビル TEL326-3040

昨年広く話題を呼んだ「快走老人録」展(NO-MA、滋賀県)にも出品されていた塔本シスコさんの個展。個人的にも「快走老人録」展で作品に出会って、熊本出身ということで大変嬉しく感じていたところに、熊本でひさしぶりの個展が開催された。作品は、キャンパスのみならず、着物、空き瓶などに描き、さらに粘土造形、人形制作など幅広い表現を行っている。そこに共通するのは、強く咲き誇る花々の息吹と、シスコさん自身の幼少期の楽しい思い出、大好きな家族や猫とのひと時など、彼女の人生を取り囲むさまざまな出来事である。シスコさんは残念ながらご逝去されており、ご子息の塔本賢一さんに作品を詳しく紹介していただいた。画集も2冊出ており、写真図版でもなお作品の魅力は溢れ出んばかりである。(H.T)

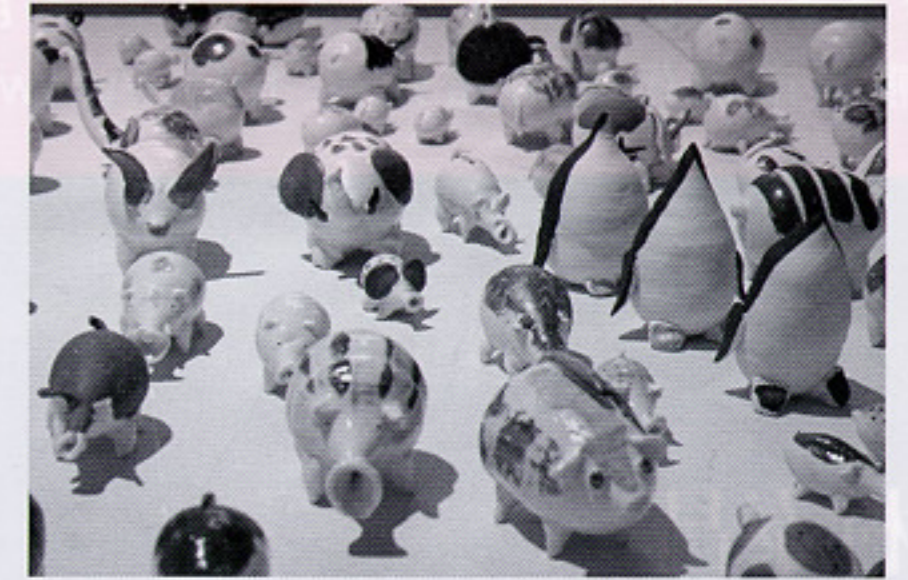


## 森のどうぶつえん 渡辺ヒデカズ×伊比井宣明×許斐良助

2007.2.16-3.25 熊本県伝統工芸館(2階特別展示室)

熊本市千葉城町3-35 TEL324-4930

熊本の現代工芸家の作品を通して、技術や芸術性を一般の来館者へわかりやすく紹介するシリーズとして開催された「森のどうぶつえん」。会場には三人三様の「森のどうぶつえん」が広がっていた。渡辺さんの作品は質感を生かしたフォルムによってこの世のものとは思えない、でも存在していたかもしれないと思わせるどうぶつたちに仕上がっていた。伊比井さんの作品は陶芸からイメージされる固さは相反するしなやかさが表現され、どうぶつたちの表情からは無国籍な世界の広がりを感じられた。許斐さんの作品は骨を思わせる独特の質感の作品群と、絵本から飛び出してきたようなユーモラスなどうぶつたちが所狭しと並べられていて、陶芸の持つあらたな表現の豊かさを感じることができた。(E.Z)



## 第12回洛神書作展

2007.2.21-2.26 アートスペース大宝堂 熊本市上通5-6 TEL354-2155

元熊本教育大学教授の森山淡草さん主宰の洛神会員27人の書作展である。漢字や少字数作品に調和体作品が多く、32点を展示した。森山淡草さんは、金文で「道」を大書し、高村光太郎のこぼれを周りにうまく配してまとめている。緒方龍生さんは何紹基(かしょうき)や金冬心(きんとうしん)を基にして創り出されたという行草書は手なれた筆さばきである。田頭由海さんの「恋月」や床内恵子さんの「蘇(和)」や松田珠里さんの子規の歌等のパネル作品は「恋月」や「和」を大書して周りに文学的なことば等をうまく配し、余白も生かされて調和体としても効果がある。西依露華さんの王維詩の行草書は、行間を生かしてリズム感の良い作で、古代文字の竹簡蘭書は元本の写真を添えたのが見る人により工夫である。(S.K)

## 立山照子版画展

2007.1.23-1.28 熊本県立美術館分館 熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

82歳になる立山照子さんは、28年前に版画制作を始め、今回が初めての個展である。題材は、常に自分で愛情をもって育て上げた野菜や花で、その対象を生かすような構図を選び、色を加えていくとお話くださった。大地のぬくもりのある瑞々しい野菜の生命力をしっかりと表現した作品であった。(Y.H)



## 第10回遊美塾写真展

2007.2.27-3.4 熊本県立美術館分館 熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

熊本市で開かれている写真講座「遊美塾」の受講生による、今年で10回目となる写真展。受講生は一般の方からプロのカメラマンまで、毎年約60人。20代から70代の老若男女それぞれの作品に共通して感じられるのは、各人の主観が自由にはっきりと表現されていることだ。主宰者で、この講座の先生でもある西本和民さんに話を伺った。「写真にいい、悪いは無い。へたくそでも撮れてほしい、楽しもうよ、と思う。」本展に出すための選考や賞などは無く、受講生皆が作品を発表できる。縛られず、楽しんでほしいという気持ちがそこにも現れている。「良い写真を撮るための技術」ではなく、「自分を表現するための技術」。そんな心の伝わってくる生き生きとした写真展であった。(S.Y)



## 第9回玄泉全国書道展

2007.1.10-1.14 熊本県立美術館本館 熊本市二の丸2 TEL352-2111

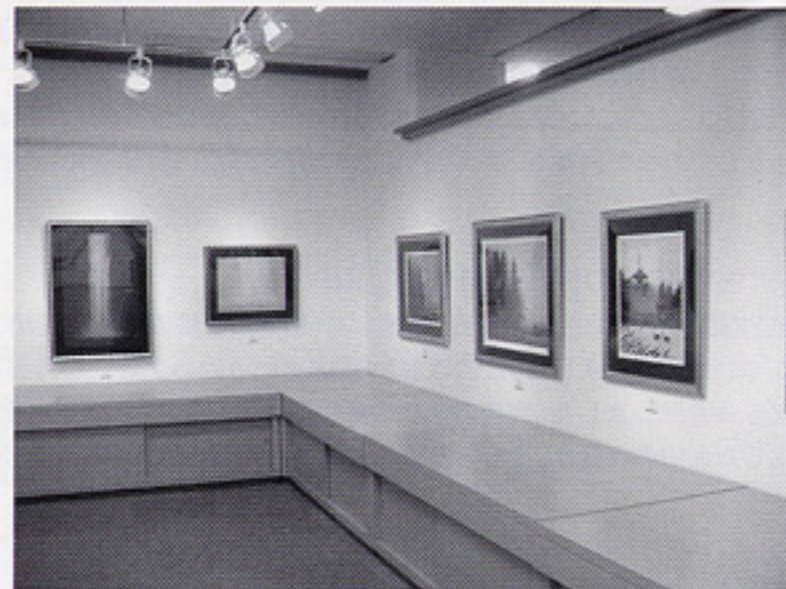
熊本市に本部を置く玄泉書道会(浦川草徑会長)が主催し、機関誌「玄泉」の購読者が参加する全国展である。今回は、現代の書道展の標準の大きさとなっている2x8尺(60cm x 240cm)を中心に、招待16名を含めて200点が展示された。展示作品の大半が漢字の行草体および漢字仮名交じりの調和体で、力作が並んで壮観であった。しかし、指導者が強力な指導力を発揮しているのに、練度が高い反面書風の類似性は否めない。その点、兵庫、大阪、福岡からの参加作品で、練度はともかく、変化が見られておもしろかった。それにしても、機関誌「玄泉」を大いに活用して、幹部、指導者、中間指導者等、ピラミッド式の確固たる組織作りが見事で、その手腕にはいつてもながら敬服する。(T.M)

## 千住博の軌跡「次代を担う作家展」

2007.2.27-3.6 くまもと阪神

熊本市桜町3-22 TEL322-1111

2003年に当館で開催した「CAMK流 現代「日本画」の精華」に出品して頂いた、千住博さんの作品が、版画を中心に40余点が展示されていた。今回は、小規模な作品が多かったが、大規模な作品とはまた一味違う、静謐で神秘的な空間が描かれていた。代表作の「ウォーター・フォール」シリーズの他にも、艶やかな色彩で彩られた古寺や自然の風景に鹿を配置したシリーズ、暗い月夜に桜が優雅に浮かび上がる霊的な作品「夜桜月下」などがあった。また、銅版画の「メタル・フォール」シリーズは、流れ落ちる滝のダイナミズムが見る者を浄化させると共に、背景の墨色が無の境地に私たちが誘うかのような印象的な作品であった。本展は、千住さんの様々な表現を堪能できる、ヴァリエーションに富んだ展覧会であった。(A.A)



## (財)独立書人団第11回熊本支部書展

2007.2.20-2.25 熊本県立美術館分館 熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

戦後の書壇に、美しい淡墨のじみを生かして、「象書」という一字書をアピールした巨匠・手島右郷が率いた独立書人団。その熊本支部(徳永兼鶴支部長)の第11回書展で、39名が大小69点を出品していた。出品目録のあいさつに「古典の臨書で基礎を積み上げ、その上に現代書を拓くことを目標とする」と打ち出しているこの会の漢字作品は、全体的に安定しており、淡墨によるじみの効果をねらった大字書(少字数)作品と、比較的多数で、濃墨による飛白(かすれ)の魅力を追求めたものに大別されるが、昨今では漢字仮名交じりの調和体も増えつつある。今回は7m x 3mという調和体の超大作が目玉であるが、概ね、3尺 x 3尺から4尺 x 4尺、3尺 x 6尺などの大作で、中央における独立展本展や毎日書道展に出品したと思われる作品が、やはり練度が高く、精彩を見せていた。(T.M)

## 第13回GROUP“宏”展

2007.3.7-3.12 アートスペース大宝堂 熊本市上通5-6 TEL354-2155

社会保険センターで23年間続けられてきた日本画教室グループ“宏”の13回目の展覧会。中根宏さんを講師としてはじめられた教室だったが、12年前に中根さんが亡くなられ、その後は荒木眞紀子さんが後継講師となった。荒木さんから語られるよう、生徒の皆さんの作品からは制作への情熱、そこから生まれる楽しみがとても感じられた。荒木さんの日本画制作を大切にしたい気持ちと、生徒さん、そして熊本美術界の発展を願う切なる想いを受け、とても励まされた。23年間続いた教室もいよいよ1年後には閉められるという。今回が最後の作品展となる。長い間、教室を守り続けてこられた荒木さん、これからはご自身の制作活動に専念されるそう。このグループ“宏”の輪が熊本の町にそして世界へとつながっていくことを心から祈っています。(N.I)

## 梶田明子・山口啓子二人展

2007.1.16-1.21 熊本県立美術館分館

熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

山口さん、梶田さんの二人展。梶田さんは、赤と黒、そして赤みを含んだ黒を用いた、女性を抽象的に描いた作品を展示。3、4年前からはじめられたこのシリーズも描いているうちにどんどん面白くなり、作品の数が増えていったそうだ。そのイメージは、宇宙へいく魂のようでもあり、子宮へと戻る魂のようでもある。梶田さんは、会場を訪れる方との会話をとても楽しみ、これからの展開について、どこまでも追求していきたいという熱い志を携えておられるようだった。山口さんは旅行によく行かれるという。60歳を過ぎてから、ヨーロッパをはじめ中国、韓国など多くの国を旅した。心象風景を思わせるような懐かしい絵は、同年代の方からとても共感されるのだそうだ。私は「古代追想」のシリーズにとっても惹かれた。中国を思わせる古代遺物の数々。そこに佇む埴輪の優しい空気感とも温かく、心地よかった。そのほか、雪のうつつら積もった阿蘇の山道を描いた作品で「春の雪」では、何度も塗り重ねられた絵の具によって、行き去った車の車輪の跡や靴の跡を巧みに表現し、構図もさることながらとても面白かった。山口さんは日本画、梶田さんは洋画と異彩な組み合わせの作品展ではあったが、お二人の息がぴったりと合った、しっくりとなじむ展覧会となっていた。(N.I)



## Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

### ◇ アルス・クマモト展

- ・ 熊本にゆかりのある若手から年輩の作家まで、ジャンルを問わず集められているので非常にみる者に強いインパクトを与えています。もっともっと良い作品を制作している人達をこれから先もどんどん発掘して欲しいです。月に何度か各観者からの講演会が企画されているので非常に良いと思うし、美術に親しみを感じさせられる。(42歳、男性、熊本市内)
- ・ 所々に空の映像があったり、説明のプレートに空がプリントされていたりして、入口の最初の説明とのさりげない統一感がでて良かった。(18歳、女性、熊本市内)
- ・ 知らなかった作家を知ることができたので良かったです！千々岩修さんと佐藤和歌子さんの絵、ステキだった。(23歳、女性、熊本県)
- ・ 出品者の説明文が小さすぎて読みづらかった。(72歳、男性、熊本市内)
- ・ 熊本在住の若い現代美術・洋・和画をもっと見たい。(44歳、男性、熊本県)
- ・ 800円は高かったと思います。もう少し安くして、多くの人に観てもらいたいと思いました。「熊本力」がこんなにあることをもっとアピールしてほしいと思いました。(56歳、女性、熊本市内)
- ・ いろんな人のいろんな思いがうずまいていて、楽しくもあり、心がドキドキした。なぜか涙が出た。同じものをつくる者として心の榮養と刺激になった。ありがとうございます。(26歳、女性、熊本県)



アーティストがみずからの作品(当館収蔵作品)にコメントをよせるコーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

# Letters from Artists

◎第5回/Gimhongsok(ギム・ホンソク)さん (from 韓国)

1964年ソウル生まれ。1996年ドイツ、デュッセルドルフ芸術大学修了。第50回・51回ベニス・ビエンナーレ出品など、国際的に活躍している。

Q1 《G5》についてお聞かせ下さい。

この作品については、以下のような評論を2種いただいております。

「世界はひとつ」というスローガンの下における今日の社会では、国のアイデンティティーや、その国が抱える諸問題は、重要視されなくなってしまうようである。しかし、現実には、社会では、依然としてナショナリズムとグローバリゼーションは相容れない関係にある。ギム・ホンソクの作品、国歌を歌う《G5》は、そのような矛盾を明らかにしている。しかしながら、この作品は、ナショナリズムを宣言しているものでも、アーティストのいかなる政治的見解をも表明しているものでもない。《G5》は、5人の韓国人(シンガー、オペラ歌手、そして一般市民...)が、韓国語に翻訳された、G8のメンバーである5ヶ国、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、日本の国歌を歌っているビデオ作品である。その5人は、一時的に歌い手となって、他の国の国歌を、あたかも彼らのお気に入りの歌を歌うのと同じような情熱を込めて歌う。作品《G5》から流れる国歌を聞きながら、観客は、それらの歌に非常に親しみを覚えるようになり、無意識のうちにハミングをし始める。世界の経済を支配する超大国の地位と権威は、皆に親しまれる人気の歌の性格と重ね合わされてしまい、「国歌を歌う」という象徴性は消滅してしまう。資本は、多文化主義である今日のグローバルな世界においては、最高の力であるというのは、共通の認識である。そして、G8は、まさに「超」大国、力の象徴として、グローバリゼーションの頂点に立っている。しかしながら、「超(super)」という言葉が日常生活の中に浸透し、ポピュラーな言葉として用いられているので、我々は、世界経済と多文化主義の本来の意味を忘れてしまっている世界に住んでいることになる。ギム・ホンソクの《G5》は、このような状況の矛盾を映し出している。即ち、グローバリゼーションと多文化主義の力は存在するけれども、これらの概念は、言葉の拡大的使用と、それらの包括的な意味の消滅によって、通俗化されてきている。

キム・ソンウォン、『何が、今日の文化をこれ程異なった、そしてこれ程ダイナミックなものにしたのか?』(「Antarctica(南極大陸)」展カタログ、アートソングセンター、ソウル、2004年、92頁)より。

\*\*\*\*\*

この展覧会において、最も人目を惹き、印象深いものは、ビデオによる映像作品《G5》である。世界的な超大国が集まったサミ

ット、G7にあてはめて、韓国語に翻訳されたアメリカ、ロシア、日本、フランス、そしてイギリスの国歌を歌うように、5人の韓国人を招いた。歌い手達は、言葉についての必要な理解もなしに、ベストを尽くして国歌を歌った。あたかも人生においての最も重大な務めであるかのように。しかしながら、真実を明らかにするのは、この真剣な試みである。即ち、現代の韓国は、実際に、現代のこれら超大国の力の影響の下に建設されてきた。そして今なお、超大国の力の影響と支配との、まさにその間で、国家の存亡をかけて揺れ動いているのである。その一方で、韓国を世界において、大いなる尊敬を集めている近代化された国にしているのは、これらの超大国からの文化的、政治的、経済的影響の受容と順応なのである。歴史的な複雑な問題と、国の門戸解放という現実的な戦略との間にある、まさにこの矛盾が、現代韓国のアイデンティティーを生み出す起爆材となっているのである。

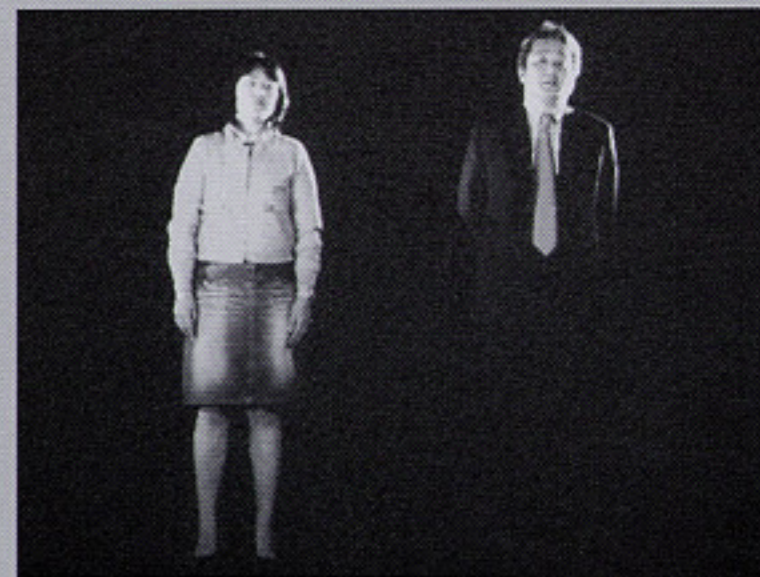
ホウ・ハンルー、『解釈における喪失(と再発見)』(「Antarctica(南極大陸)」展カタログ、アートソングセンター、ソウル、2004年、15頁)より。

Q2 読者の方にメッセージをお願いします。

可能性は恐れを飲み込む。譲歩(妥協)は可能性を倍にする。

Q3 最新作はどこで見ることができでしょうか。

森美術館で開催中の『笑い展:現代アートにみる「おかしみ」の事情』(会期:2007年1月27日—5月6日)、スペインのアルコ・アート・フェア(会期:2007年2月15日—2月19日)、ウィーンのクストハレで開催中の「Elastic Taboos」展(会期:2007年2月23日—6月10日)に出品しています。(翻訳:A.A)



《G5》2004年、DVD 熊本市現代美術館蔵

**編** 昨年の2月22日に小説家の福島次郎さんがご逝去されてより1年が過ぎました。当館出版の書き下ろし少女小説『花ものがたり』にちなみ、季節の花を絶やすことなく自宅のベランダで育てようと思いつき、早春には水仙やヒヤシンス、沈丁花の香りに包まれ、いまは牡丹が「その茶色の茎から珊瑚のような芽を見せ」つつあります。

**集** 3月24日から始まる「森村泰昌 美の教室、静聴せよ」の出品作品集荷で、アーティストのアトリエを訪問させていただきました。壁一

面の書籍、撮影に使われた衣装など所狭しと置かれた空間に胸がときめきました。会場でもその一部が展示されています、お楽しみに!

編集長 富澤治子

●執筆者一覧 ●ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山  
Syozan Kaneshiro (書道家)  
森山淡草  
Tanso Moriyama (書道家)  
本田代志子  
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)  
富澤江美  
Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)  
富澤治子  
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)

坂本顕子  
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)  
戸田彩美  
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)  
竹田 茜  
Akane Takeda (熊本市現代美術館学芸アシスタント)  
伊豆菜々  
Nana Izu (熊本市現代美術館学芸アシスタント)  
矢加部 咲  
Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.32  
2007年3月発行(春号) ◎無料◎

●発行人/南郷 宏 編集長/富澤 治子 ●印刷/コロニー印刷

●デザイン/(有)松永 壮デザイン事務所

●発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3  
TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892